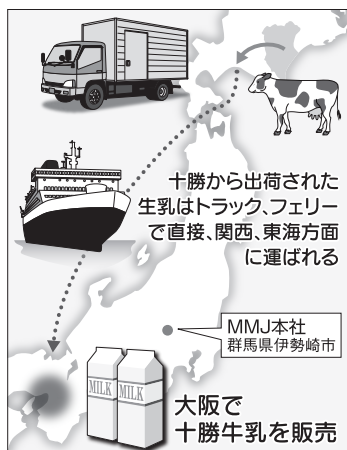


【群馬県伊勢崎市】十勝管内の2酪農家が昨年4月と今年2月、ホクレンの集荷を離れ、独立系の生乳卸会社MMJ（ミルクマーケットジャパン、群馬県伊勢崎市、茂木修一社長）に生乳を出荷している。ほぼ100%ホクレンの「一元集荷」だった十勝では異例の事態で、関係者の注目を集めている。2月下旬、帯広畜産大学の仙北谷康教授（農業経済）の視察に合わせてMMJ本社を訪れ、同社が北海道でなぜ生乳を集めるのかなどを探った。



群馬県前橋市のMMJ井上副社長の牧場から運ばれる生乳

「十勝の生乳がどの乳業会社に売られているかは、明かすことができない」。MMJ本社で「十勝牛乳」と書かれた1リットルパックのパッケージを見せてもらったが、生乳の行方については同社側からくぎを刺された。

同社が十勝で集めた生乳は苫小牧港から直接、関西方面に送られる。パッケージには、東海地方に本社を置く中小乳業メーカーの名が書かれていた。

後にその乳業に電話すると「まだ2月に販売を始めたばかりで、関連する会社や酪農家に圧力がかかるかもしれない」と、社長が名

前を伏せる理由を語った。

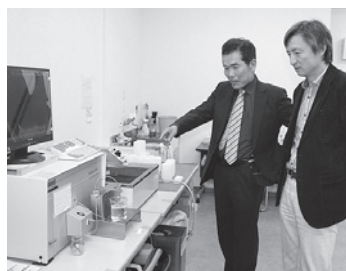
この乳業の「十勝牛乳」は、1日1200～2400パックを大阪に出荷する。社長は「東海酪連（農協系）から仕入れている生乳は毎年、前年比減だ。生産が減っているのに仕方ないが、経営者として黙って売り上げ減の計画は立てられない」と話す。

飲用、府県は生産減

飲用牛乳の消費は全国的に減少傾向とされるが、府県では需要減以上に生産量が減り、生乳確保に苦勞する中小乳業が出ている。仕入れ減を補う対策としてこの乳業が取った対策が、MMJとの取引という訳だ。

この乳業は2002年のMMJ設立直後から取引があり、関東や東北の酪農家の生乳を仕入れていた。しかし、「府県はどこも生産減。国内の半分以上を生産する北海道から集めなければ安定しない」（乳業社長）と、道産牛乳の確保をMMJに要望したという。

MMJの茂木社長はもともと、肉牛（乳用種雄）の育



MMJの生乳検査設備を説明する茂木社長（左）と視察する仙北谷教授

成農家。「専門外」の生乳卸を始めた背景には、複雑な関東の乳価制度がある。

現在、関東で生乳を集める農協系団体は関東生乳販連（東京）だが、2000年まで県ごとに団体があり、その名残で今も県によって乳価が異なる。群馬県内

は隣接する埼玉県より乳価が低いため、群馬の酪農家5人が農協出荷を離れることを決め、茂木氏に相談。以前にも酪農家から頼まれて県外の乳業に生乳を運んだ経験があった茂木氏がMMJを設立した。

MMJ設立者の1人の井上信行副社長も、群馬と埼玉で酪農を営み、群馬は農協外に、埼玉は乳価が高い農協に出荷するなど、道内では考えられない体制を取っている。

MMJが全国約50の酪農家から集める生乳は現在、1日約100トンで、うち約20トンが十勝から。社長、副社長と、仙北谷教授の教え子で帯畜大卒の社員の計3人で実質的に運営し、本社は事務所と検査設備のみだ。

1日100トン 十勝から20トン



群馬県伊勢崎市のMMJ本社

4月には根室管内別海町から4戸が新たに加わる予定だが、流通面の整備も時間がかかるため、今後も道内で集荷を広げるには課題もあるようだ。

MMJは加工用に販売しておらず、仙北谷教授は「飲用のみで難しい面はあるか」と質問。茂木社長は「飲用の需要が下がったときは、価格を下げて売る」とし、あくまで農家からは契約価格で買い取った上で、売り切ると説明した。

ただ、極端に需要が減った2006年の「生産調整」時は、MMJでは農家から買い取った後で生乳の廃棄もあったという。現在、需給調整機能も含め、操業停止した県内の乳業の施設を使った加工への進出も検討している。